
法政大学教職課程センター主催 シンポジウム

命と愛に生きる ～このとりのゆりかごから始まったいのち～

当事者の語りから考える “みんなで子どもを育てる社会”

日 時：2024 年 7 月 6 日（土）16：00～18：30
会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎 4 階 S406 教室

- 講演 1. このとりのゆりかごに預けられた赤ちゃんを 17 年間育てた助産師
元慈恵病院看護部長 田尻 由貴子
- 講演 2. このとりのゆりかごから始まった第二の人生
このとりのゆりかご当事者（大学 3 年） 宮津 航一

趣旨説明およびシンポジウムを終えて

「このとりのゆりかご」に預けられた子どもは、そこから新しい人生を生きていきます。育ち、学び、家族や友人や教師たちに囲まれて、たくさんの時間を過ごします。そして、自らもまた社会を成すひとりとなっていく。その中で、何を感じ、何を考え、何を願ってきたのでしょうか。「このとりのゆりかご」立ち上げの当事者と、預けられた当事者との語りから、「社会のみんなで子どもを育てること」とはどういうことかを考え、すべての人がこの営為の当事者となるための道筋を探りました。

当日は、ご講演に対して二人のコメンテーターが立ちました。吉田直子氏（法政大学兼任講師）と遠藤野ゆり氏（キャリアデザイン学部教授／法政大学教職課程委員会幹事）です。吉田氏のコメントは、教育と福祉を繋ぐカギは人権にあること（人権＝大切にすること＝愛）、遠藤氏のコメントは、ケア（愛）の無限とも言える需要に供給が追いつくことはないという宿命を私たちが引き受けねばならない（だから田尻氏の言う「祈り」が人間には必要になる）こと、を示していると私は考えました（なお吉田氏のコメントは論文化され本誌に掲載されていますので、そちらも併せてお読みください）。

当日はまた、コメントのあとにフロアからの質疑もなされました。教職課程履修生からの質問も複数あり、活発な応答・議論となりました。以下の収録内容が示唆するように、教職課程における人権や福祉に関する体系的な学びの担保という課題も浮かび上がってくる会になったと思います。

（法政大学キャリアデザイン学部 教授 筒井 美紀、企画調整・当日司会担当）

講演 1. このとりのゆりかごに預けられた 赤ちゃんを 17 年間育てた助産師／田尻由貴子

田尻 皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました田尻と言います。ゆりかごのシンポジウムを開いてくださいました法政大学に、このような機会を与え

ていただいたことに感謝いたします。

このとりのゆりかごを開設して 17 年になります。2007 年 5 月 10 日に熊本の慈恵病院の蓮田太二前理事長とともに、このゆりかごを開設した者でございます。今思えば、本当にあのときはさまざまな逆風の中、よく乗り切ったなという思いでいます。そして 17 年たっ

て、今日この後、登壇してくれる宮津航一君が、「僕はゆりかごから始まった命」ということで告白してくれました。そのことが開設当初の荒波のいろいろなことを払拭して、今報われた気持ちでいます。

少しだけ私の自己紹介をさせていただきます。私は1950年に熊本県の嘉島町で産声を上げまして、小学4年生のときに父が失明したことで、父の目を治してあげたいとピュアな気持ちで看護の道を目指します。父親が失明したということは、どん底の貧乏生活が始まるわけですね。それで中学校の先生が、学費もいらない、寮がある、高校の通信教育がある、聖母慈恵病院の准看護学校を紹介してくださって、そこで初めて看護師の道があることを教えていただいて進学します。

そして聖母慈恵病院の修道会のシスター（修道女）が、愛ということをしっかり私の心に、ともしびを与えてくださったのがスタートです。

◆ 45年間現役のキャリア

2000年に慈恵病院に再就職するまでのプロフィールは、資料をご覧ください。最初は慈恵病院で助産師として働き、結婚、妊娠、出産、育児のときは菊水町の保健師として14年現場で働き、その後、菊水町立病院の総婦長として地域の担い手となる看護を実践してきました。

そのとき1998年に蓮田先生から突然、電話で看護部長として慈恵病院に「どうしても君が必要だ」と懇願され、2000年9月に慈恵病院に再就職するわけです。蓮田先生が何をおっしゃっているのかを確認するために、病院全体をラウンドしました。退院前日にちょっとしたプレゼントを持って行く役割をしました。そのとき、「おめでとございます」と言ったら、そのお母さんがワーッと涙されました。産後うつです。先生はこれをおっしゃっていたということで、システムを変えました。

生ませるだけが助産師の役割じゃない。女性の一生に関わるのが助産師の仕事でしょう。安産教室をエンゼルクラスに名称を変え、助産師を受け持ち制にして、うつの尺度が高い人は病院の助産師が訪問する。産後うつゼロ、病院からの訪問看護は、今も慈恵病院で継続しています。

もう一つ、私が気づいたのがあります。産婦人科外来に、学生服を着たお嬢さんがちょこんと座っている。理由は性感染症でした。やはり性教育が足りていないと感じ、現役時代から私は予期せぬ妊娠をするお嬢さんが悪いんじゃない。それを伝えていない私たちが悪いということで性教育に取り組み、今も実践しています。

2013年、TBSでドラマを作っていただきました。

そこから、またゆりかごが全国に周知されます。

私の役を薬師丸ひろ子さんがしてくださって、このときの共演役者さんが今では超有名な朝ドラの主人公や、NHKの大河ドラマに出ています。これも私はご褒美をいただいたような気持ちでいます。

人の一生に関わる仕事をしてきたことで、今の私があるのではないかと感じています。オギャーと生まれて、助産師としてすぐに産声を聞くことができる仕事。このときに私が一番感じたのは、愛着の絆を結べるお母さんを育てたいという思いです。その思いを強くしました。そして幼少期の子育て。健やかな育ちが大事だなと強く感じます。

何といっても思春期に命の教育をしっかり伝えることが、これからどういう大人になるか、命を大切にすることが増えるのではないかな。そうすることで、社会人としてどう生きていくかを学ぶと思います。

最後に、安らかな死ですね。生物学的に私たちは全て命がなくなるけれども、そのときに、ああ、よかったという人生を送れたらいいなと思っています。

私はこの45年間現役と思って活動しています。対象者に関わる中で、私が心の中に一番持ち続けているのが「人間愛」です。そこに心を込めて、全ての人に関わるのが私の看護職としての生き方です。

◆ 視察でドイツへ、そしてゆりかごの開設へ

なぜ蓮田先生とゆりかごを開設したかといいますと、人工妊娠中絶をしないカトリックの病院ですので、その延長線上に生命尊重センターという胎児から命を守る団体があって、その誘いを受けて2004年にドイツに視察に行きました。保育園、公立病院、カトリック系病院、そしてプロテスタント系病院の4カ所で、10日間かけて視察しました。

ドイツでは2000年4月に第1号ができています。それは保育園です。ゴミ箱に赤ちゃんが捨てられて凍死してしまったのをきっかけに、お母さんたちが立ち上がって園長先生に交渉して、園の一角に暖かいベッドを置いて始まったのがシュテルニパルクという保育園。そこで初めて設置されました。そこで、いろいろなことを勉強してきました。

このドイツの母子を守る取り組みの1番目は妊娠かっとう相談所で、それがいろいろなところでできていました。ベビークラッペ（通称赤ちゃんポスト）が2004年には70カ所ありましたが、それよりもっと多い相談所があって、そこで相談することでいろいろな社会的支援につなげる。どうしても生むことができない、中絶を余儀なくされる人は相談所で証明書もらって、中絶手術を受けることができる。そこにたどり着けない人は、ベビークラッペに預けることができ

る。

匿名出産というのもしていました。妊娠かっとう相談所で相談する中で、どうしても匿名という希望が多かった。この相談所内で内密に相談を受けて、施設で安全に出産するシステムです。そこで生まれた後8週間、母子寮みたいところで育てることができる。ドイツでは自分が育てるか、養子縁組に出すかの2択のみです。重度障害児のみが施設で育てられます。

ドイツで私がびっくりしたのは、ベビークラッペに預けられた赤ちゃんが匿名出産した赤ちゃんが施設で育っていないのです。全て家庭で育っている。これに私は感動しました。私は佛教大学社会福祉学科を卒業して児童養護施設で実習していますので、この意味がしっかり分かります。やはり0歳の幼少期は、家庭で愛情いっぱい愛着の絆を結んでほしい思いがありました。

そして、匿名出産だと何が問題になりますか。出自を知る権利を奪うということで、ドイツでは2014年に内密出産制度が法整備(2014年)されています。相談所内で身元を明かして、内密に出産することができる仕組みです。まだこれは検証中です。

内密出産制度が運用されて10年になりますが、ドイツのシステムは16歳になったときに初めて自分のルーツを知る権利(出自を知る権利)が発生するということで、これもドイツではいろいろな疑問が飛びかっています。本当にそれでいいのか?私も出自を知る権利は、幼少期にきちんと知らせたほうがいいと感じています。

ドイツでは、なぜこのように命に対する思いが強いのだろうと思いました。ドイツ基本法では「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重し、かつ、保護することはすべての国家権力の義務である」。こういうことは日本にもあります。しかし、この法律は胎児にも及ぶとされている。胎児にも権利がきちんと謳われている。ここが日本とドイツの違いかなと思って帰りました。

子どもに対する考え方、ドイツの場合は社会のもの、国の宝として育てられているなど感じました。日本はどうしても親権が強く、親の手によって虐待死する子どもたちが後を絶たないということを感じて帰りました。ドイツに視察に行った帰りの飛行機の中で蓮田先生が私に問いかけます。「田尻君、日本で赤ちゃんが遺棄されているのを聞いたことがあるかい?」。そのころはあまり聞いてなかったものですから、帰っていろいろ調べたら、『クローズアップ現代』によると1週間に1人の赤ちゃんが遺棄されている。これはもう驚愕でした。

そして2004年に視察に行って、2005年から2006

年にかけて、なんと熊本で立て続けに3件、生まれたばかりの赤ちゃんが遺棄されました。一番私がショックなのは、10代の女の子が人知れず赤ちゃんを産んで畑に埋めてしまった。一つは専門学校生がトイレに生み捨ててしまった。悲しい気持ちでいっぱいでした。1人だけ、パーキングエリアのトイレに置かれた赤ちゃんが助かった。2人の赤ちゃんが亡くなり、3人のお母さんは遺棄罪に。これも私は疑問でした。なぜ女性だけ罪に問われるの?一人では妊娠しないよねということが疑問でした。

これを看護部長として蓮田先生に報告したら、今でも忘れません。「田尻君、ドイツのベビークラッペを作ろう」と。その思いがよく分かるので、経営会議にかけ、職員にいろいろな周知をしました。

私と蓮田先生の脳裏に浮かんだのが、これですね。「愛の反対は憎しみではなく、無関心である」。捨てられる赤ちゃん。医師として、助産師として、救いたいですよね。

それで、こうのとりのゆりかご、正式名称は新生児相談室です。ゆりかごを申請するまでにたくさんの課題が山積みでした。法律に抵触しないか、病院を用途変更するのに1年ぐらいかかりました。ゆりかごの許可ではなく、新生児相談室を設置し、相談できない人が匿名でも預ける場所を作ったことを一応容認していただいたことになります。

◆ゆりかごの仕組みと預け入れの現状

預けられると、警察に連絡しなければいけない。警察はすぐおいでになります。この赤ちゃんが虐待を受けていないか、いろいろな問題はないか。問題がなければ警察は遺棄罪には問いません。これでゆりかごに苦悩して預けに来た人は、女性を罪に問わない。赤ちゃんの命につながる。

そして預けられた赤ちゃんは、慈恵病院がずっと育てるわけではありません。匿名でも預かるのですが、匿名がほとんど排除されています。病院のシステムは赤ちゃんが預けられるとランプが付きブザーが鳴り職員に知らされます。ゆりかごにスタッフ2人が駆け付けます。1人は外を見る。もちろん一番大事なのは赤ちゃんの命の保護。そして外を見ると、そこに立ちすくんでいたり、ゆりかごの中に手紙が残っていたり、匿名が職員の努力により排除されるケースが多いです。

匿名が排除された赤ちゃんは連れてきた人の都道府県居住地の児童相談所へ移管されます。児童相談所が赤ちゃん引き取りの支援をします。けれど赤ちゃんを引き取られないケースが多いので、引き取られなかった赤ちゃんは乳児院、児童養護施設、里親、養子縁組、

特別養子縁組で育てられます。

どこから預けにきたか分からない赤ちゃんは、社会的養護として、乳児院、児童養護施設、里親、養子縁組、特別養子縁組にて育てられます。この17年間、ゆりかごに命を預けられた赤ちゃんは179名です。これをどう判断するかは皆さんの考えにお任せしますが、ゆりかごに預けた理由としては貧困。そして未婚や予期せぬ妊娠。さまざまな理由で命が託されています。

私は、ここによく連れてきてくださった、ウエルカムです。危険な所に捨てられるより、命をつないでくれた人に感謝です。赤ちゃんを預けに来た人は、熊本県以外の九州が一番多く、関東、中国、関西。全国から預けに来られます。92%はどこから預けにきたのが判明しています。熊本県内からの預け入れは14名です。自宅出産が一番多いのですが、医療機関で出産をした人が、なぜゆりかごに赤ちゃんを預けに来ているのか。その母親の精神状態を助産師は気づかなかったのか、私は腹立たしく思います。精神ケアをしていない、お母さんの心理状態を理解できていないということです。

中部地方から赤ちゃんを預けにきた人が看護学生という事が判明し、その看護学校を訪ねて行きました。学校の寮内で一人孤独に出産をしていた事を先生へ報告したところ、大変ショックを受けられていました。さらに10年後、看護学生だった彼女がどんな思いで熊本へ赤ちゃんを預けに来たのか。そして私と接触したことで、気持ちの変化と赤ちゃんを引き取るまでの長い期間のお話などテレビ取材を通して伺った事がありました。

今年、新しい彼ができて結婚して第2子が生まれました。いかに寄り添い続けることで、その子の人生が変わる。私が心配なのは、県外に行ったお子さまたちが児童相談所のケアを継続的に受けられているのかどうか。私は知ることができません。

一つ悲しい事件がありました。ゆりかごに預けて地元へ帰されたお子さまが、母子家庭でした。お母さんもせっかくゆりかごでつながった赤ちゃんも母子心中してしまいました。これは、児童相談所の関わりの希薄さだと私は思います。ですから、児童相談所の役割は大きいと感じます。

それと、ゆりかごに預けに来る人たちは貧困世帯だけではなくて、公務員、医療関係者、教職員、宗教家だったりします。

(対応事例の動画上映)

いかがだったでしょうか。彼女は放っていたら絶対引き取っていませんから、子どもの誕生日には必ず会いに行っていました。保健師の経験がある私は家庭訪

問をして生活状況を確認しました。最初に行ったとき、鍋とか煮炊きするものがなかった。この人、料理していないなと思い、相談員と連携を取りながらずっと見守り続けまして、彼女が引き取ったのは小学1年に上がる時です。このきっかけを逃したら彼女は引き取らない、先に進まないと思っていました。小学1年生で引き取りましたが、それでも子どもの誕生日には彼女の家を訪問していました。

今年の春、「田尻さん、結婚して、赤ちゃんが生まれました」と嬉しい知らせがありましたが、子どもだった彼は中学1年生になっています。赤ちゃんのことをどう感じているかと問いかけました。「かわいい。弟ができてよかった」。それで私は安心して、この家族は大丈夫だと確認できました。

ほんの一例しか今日ご紹介できませんが、預けられた子どもたちが今どこでどのように育てられているか？身元判明が135名、引き取られた赤ちゃんはわずか32名です。厳しい環境の中で、ゆりかごにたどり着いていることが証明できます。特別養子縁組が63人。これが何よりも私はうれしい、ドイツみたいになったなと。そして里親さんですね。施設で今こういうマッチングなどを行っています。

熊本県に残った赤ちゃんは35名中24名が特別養子縁組で、愛情ある家庭で育っています。嬉しいです。里親さんが5名、まだ施設にいる子が6名です。

◆相談で救われる命：ソーシャルワークの必要性

ゆりかご運営に携わった8年間でつないだ命は112人です。相談で救われた命が多いということを今からお伝えします。相談が最初は500件。1000件。年を重ねるごとに急に4000件、5000件、7000件。薬師丸ひろ子さん主演のドラマの影響で全国に広がって、あそこに相談に行ったらいいんだと、相談の電話が増えていきました。

2015年、私は慈恵病院を退職します。それで先ほど言いましたように、この相談窓口をつくるのが大事だということで、全国妊娠SOSネットワークを2015年に立ち上げました。全国に相談窓口が広がったことで、慈恵病院の相談が少しずつ落ち着いてきました。

私が今年一番うれしかったのは、熊本市がやっと動き出しました。内密相談に力を入れ、熊本市の相談が慈恵病院の相談を超えました。去年、熊本市が2585件、慈恵病院が1643件。蓮田大二先生も「ゆりかごはシンボルでいい。ここに相談に来てもらったら、助かる命があるんだという思いで来てほしい」と。まさしくそのようになりました。

私が8年間で関わった相談の分析で、虐待防止学会

で発表したものです。相談者は学生さんが多いですね。次に無職の方が多いです。相談に来た理由としては、未婚の妊娠、若年妊娠、不倫、望まない妊娠です。予期せぬ妊娠をしないようにする教育が足りていないことと、予期せぬ妊娠をした人を責める文化が日本社会にあることが推察できます。

相談に来た人に一生懸命ソーシャルワークをします。ソーシャルワークをすることで、ドイツみたいに自分で育てる 236 人、特別養子縁組 235 人、一時乳児院で預かってもらって整ったら引き取るという人が 38 人、8 年間で 599 人の命をつなぐことができたことは、本当によかったなと思っています。

母子の幸せのために、妊娠中から相談を受けることがいかに重要であるかということがお分かりいただけましたでしょうか。そうすることで、自分で育てることもできます。育てられないなら子どもに恵まれない家庭に命をバトンする、特別養子縁組という素晴らしい制度があります。家庭で育つことが私はとても重要だと思っています。

そして私がソーシャルワークするときに一番大事にしていることは、匿名の相談ですので、「あなた、誰ですか？」なんて聞きません。まず傾聴。そして共感し、親身になり、寄り添うことで、いろいろなことを話してくれます。何よりも責めないことが大事だと思っています。

小学生、中学生、高校生の相談をたくさん受けてきました。あるケースですが、取材を受けてくださったお母さん、中学 3 年生のお嬢さんが妊娠した事を必死に守ったお母さんがいます。9 月初旬の予定日だったので、早めに慈恵病院に入院してもらって、おなかが大きくなる事で偏見、いじめに遭う。そういうのを恐れて、弟はおばあちゃんの家に預けて、とにかく守ってくださった。そして無事に出産して、中学 3 年生の女の子は育てたいという気持ちになりました。「育てたい、田尻さん、私、育てたい！」と言っていたんですが、最後に「じゃあ、あなた、高校はどうするの」とやり取りをする中で、「ああ、やっぱり私、高校も行きたい。育てられない」ということになって、特別養子を選び、春には高校生活をスタートさせました。

そういう予期せぬ妊娠をした中学生から、その後いろいろなお手紙をいただくのですが、私が一番うれしかったのはこういう手紙です。「コロナ禍でなかなか就職活動もできなかったけれど、今はとても幸せで充実した毎日を送っています」と。

こういう手紙が届くことが、私は一番幸せだと思う時です。予期せぬ妊娠を、喜びの出産に変えることができる。それは妊娠中から相談を受け、ソーシャルワークをすること。そして祈ることです。予期せぬ妊

娠をして出産した女性と、「あなたが生んだ赤ちゃんが幸せになること、そしてあなたがこれから社会人として胸を張って生きていこうね」ということをともに祈ることが重要です。ただ言葉だけでは駄目だと私は思います。

正月には年賀状がたくさん送られてきます。これを見るときに、相談してくれたお嬢さんの顔、そして成長した子供の顔、双方幸せになっています。よかったなという気持ちでいっぱいです。

◆ルーツを探る旅：真実告知

最近我真実告知、ルーツを辿る旅に来てくれます。(対応事例について動画上映)

一つの事例、山下ジュン君(仮名)9 歳です。謎解きの旅に来てくれました。五感をもって親はサポートをするだけ、乗り越えるのは本人。預けられた児、相談で救われた児が成長しています。

2014 年日本財団で社会貢献事業の表彰を受けました。ゆりかごを開設に関わらせて頂き、本当に光栄に思っています。

参考文献

田尻由貴子(2016)『はい 赤ちゃん相談室田尻です』ミネルヴァ書房

田尻由貴子(2017)『赤ちゃんポストはそれでも必要です』ミネルヴァ書房

講演 2. こうのとりのゆりかごから始まった第二の人生／宮津航一

宮津 皆さん、こんにちは。熊本から来ました、こうのとりのゆりかご当事者の宮津航一です。現在、熊本県立大学の 3 年ですが、こういう場に立つと初対面の方からは 30 代、40 代とよく言われます(笑)。今からこうのとりのゆりかごの当事者として、こうのとりのゆりかごから始まる第 2 の人生ということで、お話しさせていただきます。

◆生い立ち

2003 年生まれで、生後 5 カ月のときに産みの母を交通事故で亡くしています。2007 年 5 月 10 日、ゆりかご開設初日に 3 歳で預けられました。同じ年に里親の両親に引き取られ、高校 2 年のころに普通養子縁組を行い、高校 3 年生で子ども食堂を立ち上げ、高校卒業、大学入学を機に全国で初めて実名でゆりかごの当事者であることを公表して、現在、当事者活動に取り組ませていただいています。今は「子ども大学くまも

と」を田尻さんと一緒に立ち上げた活動がありますので、後から説明します。現在、当事者活動の傍ら、様々な活動に取り組ませていただいています。

ゆりかごについては、開設の思いから田尻さんがお話をしましたので、私の話に早速入りたいと思います。ゆりかごに3歳で預けられたのですが、よく当時の記憶が残っているんじゃないかと聞かれるんですね。しかし今覚えているのはゆりかごの扉の絵1枚だけです。今は新しく変わりましたが、この扉の絵だけは写真で切り取ったかのように、自分の頭の中にははっきりと覚えているものがあります。自分とこのゆりかごの扉の先にあったもの、一緒に預けられたのは服と靴だけです。自分がちょこんとこのゆりかごに座っていて、服と靴だけが置いてあったと聞かれています。

私の場合は服と靴しかなく身元が分からなかったもので、熊本市のほうに籍を置いて、それから単独の戸籍を作ってもらい、宮津航一の「航一」という名前も実は本籍名ではなくて、一人戸籍で幸山熊本市長が付けてくださった名前です。それから里親家庭に引き取られて、本当に優しい両親に恵まれたなと思っています。

両親ともに里親をやってまして、ファミリーホームという形で子どもを最大6人お預かりできるということで、今も6人の子どもたちと一緒に生活しています。もともと両親がボランティア活動とか、特に非行少年の自立支援とかをやっていて、そういう中でホームレスの子どもたちを4年間育てた経験があるんですね。だから、宮津さん、里親になりませんかという話から話をもらって、最初に里子として打診があったのが私と。

両親は僕以外に、これまで30人以上の子どもたちを里親として養育しています。両親には男の子ばかり実子が5人いましてそれぞれいろいろな職に就いていますが、私は6番目ということで、5人の兄と2人の親が一気にできる。本当に恵まれた人生だなと思っています。

これは幼少期の写真ですね。皆さんから見ても一番左ですね。誕生日ケーキが見えると思います。たぶんお店で見る誕生日ケーキとは少し不格好というか、きれいな形ではないですが、毎年父が手作りでケーキを作ってくれて、あれは僕一人しか写ってませんが、本当は先ほど見せた家族がいて、口を大きく僕が開けて喜んでいる姿が見てとれると思いますが、先ほどプロフィールで言ったように、早くして母を亡くしていますので、大家族でみんな誕生日を祝ってもらったのはたぶんこの4歳のときの誕生日が初めてなのかなと。そういう喜びも見られる写真です。

あとは3人だけ写っていますが、わが家では血のつ

ながりはないけれども絆を大切にしようと、毎年家族が絆づくり旅行ということで県内各地に出かけて、一緒にいろいろな思い出を作って、絆を深めて家族になっていったんじゃないかなと思います。こういう楽しい幸せな日々がある一方で、記憶には残っていませんが、いつも3本指をくわえていました。どういうときに指をしゃぶっていたかという、夜一人になったときとか。これも一人になっているところを誰かが撮った写真です。そういうとき、寂しさを感じたときに指をしゃぶっていたと両親から聞いて、両親や周りの家族に大切に育ててもらって、僕が最初にうちに来たときに、父が兄たちに僕を「1日3回は抱っこしよう」、「1日3回抱っこしてやってくれ」という形でいろいろなスキンシップをとったり、そういう中で少しずつ自分の寂しさや不安もなくなって、指しゃぶりもなくなって、今のようになっているところなんです。

先ほどお話ししたように、ゆりかごに預けられたときに服と靴しかなかったということで、それ以外の自分の身元を表す物がなかったんですね。なので、名前が分からなかったり、もちろん生まれたときの写真とか由来とか、そういうものもない中で一時期過ごしました。

小学校のときに生い立ちを振り返る授業で、写真がなかったので、一番上の兄の写真を使わせてもらったり、中身も想像して作ったり、誕生日もこれは11月3日と書かれています。実は僕の誕生日は11月5日で、後から分かったんですけども、それまでは誕生日が分からなくて、誕生日も推定で11月3日、文化の日が誕生日でした。その後、11月5日に誕生日が変わったので、たぶん書き換えた後がちょっと残っているのかなと思いますが、当時はそういうのもありました。

◆出自が分からないということ

その後、自分の場合は出自が分かりまして、母が亡くなっていたり、誰が預けたか、どこに母の眠っている墓があるとか、そういうのが分かりました。分かった年の夏に、父と一緒にふるさとを訪ねる旅ということで、一緒に歩いて出かけました。私の場合は母が眠っている墓、その出生地のほうに行っているいろいろな記憶があります。パズルのピースを映していますけれども、自分の場合は3年間、ゆりかごに預けられるまでの3年間の記憶というのは残っていないんですね。

よくあるのは、心にぽっかり穴が開いた感じに捉えられることです。人によって違いますけれども、私の場合はぽっかり穴が開いているというよりは、パズルの1ピースが欠けている感じです。このパズルの1ピースと一緒に父とふるさとを訪ねる旅でいろいろなところを見て歩く中で、同じピースは見つからなかつ

たんですね。殆ど情報というものは分からなかった。一緒に回ったり、近くの人に話を聞きに行ったりしましたが、殆ど分からなかった。でも自分の足で歩いて、目で見て、耳で聞くことで、少しずつ心が埋まったような感覚があったなと思っています。

このとき、父が母の墓前で「航一くんは、僕たちが一生面倒をみますから」と、僕の目の前で言ってくれたことが僕の中ではとても心に残っていて、血のつながりはないけれども、自分を本当の子として里親の両親が見てくれているんだと。そういう熱い思いをもっているんだというのを肌で感じた瞬間でした。

生い立ちが全部、自分の場合は分かっていません。でもこの後に分かったこともあって、出自が分からなかったときはやはり寂しさとか、自分はどうだったんだろう、自分はどのような生き方をしてきたんだろうといろいろ考えることもありましたが、まずは両親が自分の生い立ちを探すときに寄り添ってくれたことが本当に大きかったなと。だから、自分も一緒にこのお墓に行きたいというのをすんなり言えたし、一緒について行ってくれたと。

両親は相当な思いがあったというのは、後から聞かれました。単に「航一が知りたいから行こう」という楽観的な気持ちではなくて、もし実際に出生地に行って親戚だったり、ルーツが見つかって引き取りたいといったときに、向こうが親権が強いからそっちに行かないといけないかもしれない。今まで自分が大切に育てた僕がそっち側に行くのが本当は望ましいけれども、やはり嫌だなという思いなどもあった。でも僕が知りたいのであれば、彼のために行かせてあげようということで連れて行ったんだと、僕が生い立ちを公表した後ぐらいに聞かされて、両親も覚悟の上で連れて行ってくれたんだと、そのときに感じました。

なぜ自分がこうして生い立ちを公表して、皆さんの前で話ができていくかという、今お話しした事実ですね。真実告知を受けていたからということです。生い立ちをしっかりと両親から教えてもらっていた。それは単に事実を、ゆりかごに預けられたんだよ、里親ができたんだよという事実だけを伝えるのではなくて、それを点で伝えるのではなくて、その点を線にしてしっかりと僕が前向きに捉えられるように伝えてくれたと。どういう背景でゆりかごに預けたかは分からないけれども、きっと僕のことが大切だったからゆりかごに預けに来て、ゆりかごに預けたからこそ僕は救われて、今の里親の両親の下に迎えることができたんだよ。そして今の生活があるんだと、僕がプラスに捉えられるように。

でも、これは決して嘘ではないです。嘘ではないけれども、僕がプラスに捉えられるように両親はその年

齢に応じて話をしてくれた。先ほど言ったように、僕がゆりかごの扉の絵だけを覚えていたので、熊本では毎年5月10日になると、ゆりかごの放送が必ずされるんですね。そういう報道を見て、僕が「ここに行ったことがある」と両親に言いたみたいで、そのときに父は、この子は覚えているから、嘘をついたらいつかはばれると。

だから、もう正直に分かる範囲で伝えていこうということで、そんな改まって話をするのではなくて、僕がふと疑問に思ったり質問したり、ゆりかごの特集が組まれたとか、そういうときに必要に応じて、両親がずっと僕に分かる範囲で落とし込んで話をしてくれました。

◆真実告知とは何か

田尻看護部長がお話しされましたけれども、預かる背景にはいろいろあります。中には予期せぬ妊娠がある。果たしてこれを子どもたちに伝えるべきか。ゆりかごの生い立ちを伝えるとなると、そこも含めて子どもたちに伝える必要があるのではないかという見方をよくされます。

でも、私はそこは必要ないというか、子どもに絶対伝えなければいけないものではないんじゃないかと思っています。子どもがどうしても奥深くまで知りたいのであれば、伝えるべきだと思いますが、子どもが一番求めているものは自分のことだと思うんですね。自分のこれまでの歩み、自分の生い立ち、そのプラスアルファとして周りのこと、親のことだと思うんですね。

僕の場合は特に自分のことが分からない3年間のブランクがあったので、自分のことに対する思いが強かったんだと思います。生後まもなくして預けられた子どもたちも、自分のことはなかなか情報的にないかもしれない。大事なことは、結局はその子本人の人生ですから、その子の内容、その子の人生をしっかりと満たしてあげないことには、いくら親のことを満たしても、やはり本人の人格形成というライフワークにはつながらないだろうなと。

そういう意味で、よく出自情報、生い立ちの何を子どもたちに伝えるかとなると、すぐ親の情報にいくけれども、そこだけではなくて、その前に本当は子どもの情報があって、そこをしっかりと満たした上で、親のことも可能な限り見つけて、探していくことが望ましいのではないかと思います。

予期せぬ妊娠は子の情報か親の情報かと考えれば、それは親の情報です。親がどういう経緯を経てその子を生んだかであって、子どもは生まれてからが自分の生い立ちです。なので私は隠すというわけではなくて、

子どもに必要なことというよりも伝える必要がないものだと思うんですね。それをわざわざ土俵に上げて、こういう事実があるからゆりかごの子には出自をあまり伝えないほうがいいのではないか、そういう論点を言う人もいますが、そこははっきり分けて考えないと、そういう情報があるから子どもに伝えなくてもいいという、子どもは知らないわけです。

実際にゆりかごに預けられた子どもたちの中で、ゆりかごに預けられたと子どもに告知している割合は18%、179人の子どもたちが預けられる中で、2割の子どもたちしか自分がゆりかごに預けられていることを知らない。残りの8割は知らないんですね。これは時期とかにもよるので、2割がいけないとか断言はできませんが、8割の子が知らない。そうすると、いくら出自情報を守ろう、担保しようと、内密出産とか、慈恵病院が情報を管理しているけれども、結局は養親さんが子どもに生い立ちを告知をしなければ、その子が生い立ちにたどり着くことはできない。いくら情報を持っていたとしても、いくら慈恵病院や行政が情報を集めても、その子がアクセスできない。アクセスできないというよりも、知らないからアクセスできない。

なので、私は生い立ちを伝えることは必要だろうと思っています。いろいろな伝え方があります。ライフストーリーブックで絵本みたいな形でやるのもいいでしょうし、写真を用いてやるのも一つの方法だと思います。正解がないから養親さんは困っているんですね。いつ伝えればいいのかも分からない。子どもの特性によっても捉え方が違うから難しい。

でも、そこには児相とかいろいろな支援機関とかが関わって、ただそこで養親さん任せになるのではなく、教職課程の人がもし教員になれば先生などもそれに携わっていかなければいけないところかなと思います。私も実際に生い立ちを振り返る授業のとき、先ほど写真がなかったと言いました。このときに学校の先生は知っていたんですね。だから先生が持ち帰っていいよ、家でやってきてごらんと言って、僕の場合は家で、他の子も家に持って帰ったんですけど、家で家族と話し合って作って持ってくるみたいな、そういう配慮も学校の先生にしてもらった記憶があります。

私が伝えたいことの一つに、出自が分からないことも出自と。生い立ちが分からない子はゆりかごに預けた子の3割近く、30人いるというふうに聞いていますが、分からないから伝えないというのは、私は駄目だと思うんですね。先ほど言ったように、いくら情報を残していても分からないから伝えなければ、アクセスできないし、探すこともできない。でも分からないということを伝えていれば、その子はその情報を受け取って、自分で探そうと思えば行くことができるん

です。

私の場合も、幼少期の最初は全く分からなかった。でも、分からないということも両親から伝え聞いていたから、実際に母が亡くなっていたことだったり、母の場所が分かったときも、ああ、分かったという喜びのほうが大きかったし、「じゃあ、一緒にお父さんを探しに行こう」と言って探しに行くことができた。なので、分からないからと言って伝えなかったらゼロなんですね。でも、分からないことを伝えれば、それは決してゼロではなくて、0.1、0.2、次につながるものだと私は思っています。

これは戸籍の全部事項証明書です。ふと気になって、自分の戸籍とかを見に行こうと思って、実際に行ったんですね。いつもは紙で持ってきているんですけども、スライドだけになりました。ここに養子とか、僕の生まれた誕生日、後から名前変更の話をしますけれども、養子縁組をしたことも書いてあります。養子縁組とか特別養子縁組をすれば、こうやって戸籍に残ります。養子縁組の場合は、こういうふうに養子縁組と書かれます。特別養子縁組の場合は、民法817条の2ですかね。そういう形で特別養子縁組の条文がここに載る形になります。

この間、私はマイナンバーカードを持って、200円を持って、コンビニでこれを取ってきました。マイナンバーカードが普及して、役所とか住民センターとかに行かなくても、コンビニでこれが取れるようになったんですね。何を意味しているかという、ゆりかごの子だったり、そういう出自が分からない子どもたちも自分のマイナンバーカードを持って、200円持っていて、パスワードが分かれば自分でこれを取れるということです。

それがいつ取れるかは分かりませんよ。例えば就職するとか、大学進学、高校進学するときにやはり必要になってくると思います。そういう取ったときに養子縁組と書いてある。民法817条の2、これは何だ。特別養子縁組だと知ったときに、それをもともと両親から聞いているのか、それとも自分がこの紙を見たときに、これ何だと思って、そこから調べて現実を知るのとでは全く、大きな違いがあるんです。たったこの紙1枚ですよ。でも、この1枚に入っている情報量の現実、重みというのがやはり大きいんだと、私はこれを見たときに思いました。

なので、やはり子どもたちにはしっかり告知するべきだし、例えば親がずっと隠しきっても、自分の親戚や周りの人がボロッと言ったりする場合もあります。そういうときが一番最悪なケースというか。親は隠しているから親には相談できない。探そうと思っても、自分一人でしか探せなくなる。親に相談できなくなる。

だから、養親さんがまずはしっかりと告知をする。それを学校の先生もそうだし、幼稚園の先生もそうだし、社会みんながサポートしていく。何かあったときに、その子どもたちが思いを吐ける場所、つながりを作っておくことが必要なんだろうと思います。

◆家族とは何か

2020年、4年前のクリスマスに戸籍上の親子になって養子縁組をしました。繰り返しますが、うちの場合は血のつながりはない家族です。これを前提に、家族とはということで一つ、エピソードをお話します。

小学校の中学年ですかね。登校班の中に一人はハンディを抱えた子、もう一人は体格のいい子と一緒に帰っていたら、その体格のいい子がハンディを抱えている子にランドセルを持たせるんです。僕はその状況が嫌だったので父に相談したら、「男なら闘ってこい。人生には一度や二度、闘うことがある」と格好よく言われて、何の答えにもなっていませんけれども、どう闘おうかなと思いながら、また同じようなことがあったときに「もうお前と一緒に帰らん」と言って、別々に帰ったことがあったんですね。

その後、向こうの親御さんから電話がかかってきて、1本目は僕が取ったみたいで、2本目を母が取って。向こうの母は僕からいじめられたと子どもから受けて、自分の子を守ろうとして「航一くんがいじめた」とたぶん言ってきて、こっちはちゃんと知っているから、母親は「そうじゃない、そうじゃない」と言って、お互いに平行線のままやりとりをしているときに、向こうのお母さんが、「航一くんは親がおらんけん、そういうことするんでしょ」とポロッと言われたんです。それに、うちの本当に優しい母が、僕の目の前であるにもかかわらず涙を流して怒って、「うちの子はそんな子じゃありません」と言って電話をガチャンと切ったんです。それが僕の中ではとても印象深く残っています。

そのお母さんも悪気があって言ったんじゃないんですね。つい自分の子どもを守ろうと思って、そのときにそういう偏見もあるんだなというのを感じましたが、そのお母さんの悪口を言いたいわけではなくて、自分が言いたいのは、これは父が教えてくれた言葉ですけれども、「家族とは血がつながっているということではなくて、『最後まで味方』でいるのが家族だ。何があっても『最後まで味方』でいるのが家族だ」と、このときに父に教えてもらって、両親もそれを自分に体現してくれたなと感じました。

皆さんも「家族とは」ということをぜひこの機会に考えてもらって、自分にとって家族とはどういうものか。よく家族＝血縁、血のつながりと見られがちです。

それも一つの家族の形ですが、いろいろ多様な家族のあり方がある中で、私は里親家庭で育ってきて、血のつながりはないけれども家族の絆と、最後まで味方である存在がいてくれたことは本当によかったなと思います。ぜひ今日ここに来ている皆さんも、あらためて自分の家族とはというのを振り返って、考えてもらえればいいなと思います。

◆熊本でも開いた子ども大学

「子ども大学」を聞いたことはありますか。東京の国立に「子ども大学くにたち」というのがあります。児童が学生となって、大学の教室、講堂で、小学4、5、6年生を集めて、専門家とかその道で活躍されている人の話を聞くという教育プロジェクトで、ゆりかごと同じくドイツ発祥です。2002年発祥で、そこからヨーロッパ中に広まって、日本では埼玉の川越で最初にできています。

ここに携わっていたのが、池上彰さんです。『世界一受けたい授業』とかをやっていますが、池上彰さんが「くにたち」の理事長を務めている稲葉先生と友人で、ぜひ国立に広めてほしいというところから2019年、ちょうどコロナが始まる少し前にできて、SDGsを基軸にやっています。

なぜ「くにたち」が熊本にきたかという、講演資料の後ろに載せていますが、田尻さんが著書を2冊出しています。これに関わったのが編集者の稲葉茂勝さんで、そのご縁でずっと田尻さんとはつながりがあって、「熊本でもやってみないか」と声かけがあった。そこから「航一君、一緒にやらないか」と僕に振られてからの経緯で、昨年10月に「子ども大学くまもと」を私と田尻さんが発起人となって立ち上げました。

先ほど、自分の生い立ちを話しました。大変な思いをした子だとか、かわいそうな子だと見られることがあるんですね。全く自分はそういう感覚はなくて、逆に他の人とは違う経験ができたし、先ほど見せたように優しい家庭に引きとられて、いろいろな人に恵まれて、機会に恵まれて、こうして皆さんの前でお話しているわけです。

今、子ども食堂もやっている中で感じるのが、外見では分からない、内面的な心が十分に満たされていない子どもたちが多くいます。それは何かというと機会とか、人とのつながりというものがない、欠けているなと感じています。一つでも二つでも子どもたちに夢とか希望とか、人の話を聞いて可能性とか視野を広げる機会を、こういう人がいるんだ、こういう生き方があるんだというのをぜひ感じてもらいたい。

特に、「くまもと」ではふるさと学、生き方学、一番大事なのが「くまもと版」として、いのち学です。

私が理事長で、田尻看護部長が学長で、この二人で立ち上げたからには、やはり私たちが経験したこと、思いを、いのち学として子どもたちに愛を育み、命を大切にすることを育てるために伝え続けることが必要だよなと、そういう思いです。全部の子どもが大学がこれを行っているわけではありません。それぞれが特色ある活動をやっていますが、「くまもと」はこの三つの柱を基軸に、子どもたちに講義を展開していこうということです。

1回目は紺野美沙子さんに熊本に来ていただいて、3月に開催しました。つい7月1日に記者会見を二人でして発表した2回目が、私と学長でいのち学ということで、まさに子どもたちに今日お話ししている内容だったり、小学4、5、6年生が対象なんですね。純粋な時期というか、そのときに子どもたちにいろいろな人の話を聞いてもらって、素直に感じてもらって、それを子どもだけでなく、親子で聞いてもらう。そうしたら親・保護者の考え方・感じ方と、子どもの感じ方が違うと思うんですね。それをぜひ家庭に持ち帰って、家庭での対話の機会にしてもらいたい。家庭での会話が希薄化している中で、ぜひとも親子で学んでいただきたい。8月17日に開催するということで、今、学長と熊本で走り回っている状況です。

◆切り開く活動のこれから

ゆりかごの当事者というところに戻りまして、なぜ生い立ちを公表したかということ、まずはゆりかごへの感謝の思いです。ゆりかごがあったおかげで、自分は救われたと思っています。産みの母が亡くなって、親族が僕を預けてくれたわけですがけれども、どこに預けるかによっては僕の人生は大きく変わっていたし、そもそも生きていくかどうか分からないわけですよ。そういう中で、ゆりかごにしっかりと命を託して、僕の将来を託してくれたことで、今こうして皆さんの前でお話しすることができています。

預けられた子どもたちへのメッセージがあります。179人がこれまで私を含めて預けられています。今のところ、実名で顔を出して公表しているのは私だけです。全員とつながっているかということ、そういうわけではないですね。それぞれ全国各地にそういう子どもたち、ご家庭が広がっている中で、自分がこうして表に出ることで同じ仲間がいる、当事者がいると少しでも子どもたちとか養親さんに伝わればいいなという思いがあって、生い立ちを公表しました。

これまでの「15年」と、これからの「15年」ということで、ちょうどその真ん中の年に公表しましたが、これまではやはり周りの大人が語ってきた15年だったんですね。ゆりかごに預けられた子どもたちが語る

機会は、ほとんどなかった。

小学4年ぐらいから匿名で僕も生い立ちを公表してきたんですが、やはり預けられた子どもたちの声が必要だろうというので、そろそろ公表しないといけないと思って、高校卒業を機に公表しました。これは動画でも上がっているの、詳しく見たい方はぜひ見ていただければと思います。

これから当事者として何をしたいかということ、先ほどの生い立ち、真実告知ですね。子どもたちにどう生い立ちを伝えていくか。いつ伝えるか。いろいろな課題があって、養親さん、ゆりかごに預けられた子を育てている方々も本当に悩まれています。そういう見逃してはいけない課題を。ゆりかごに預けて終わりかということそうではなくて、子どもたちはそこから先も今、いろいろなところで生活して生きているわけです。そういう子どもたちにもっとやはり焦点を当てて関わっていかないといけない。

ゆりかごは必要か不必要かずっと議論されていますが、僕はもうその次元ではないと思っています。それを言っても変わらないんですね。不必要なのであればどういうところが不必要なのか。相談が必要だったり、予期せぬ妊娠にならないために性教育が必要だったり、そういうところを私たちがしっかりと課題を見つけていって、自分たちにはどういうことができるんだというのをやっていかないと、必要か不必要かと言ったってゆりかごを求める人もいるわけだし、そこにニーズがあるわけです。そういうのを発信していかないといけない。

あとは、預けられた子どもたちのネットワークをやはり作っていかないと、預けられた子どもたちだからこそ抱えている課題だったり、養親さんが抱えている課題をしっかりと吸い上げて、社会に発信していく、一緒にピアサポートをやっていくことが必要だろうと思っています。

生い立ちを公表してからこれまでに50回近く講演しましたが、いろいろな感想をいただいています。その中で一番印象に残っている言葉を映したいと思います。本当にこの言葉を感想でもらったとき、自分の活動が評価されているようにも感じたし、これから先、こんな生き方をしていけないといけないと感じました。

「麦の穂の中を切り開くように、先頭を歩く者は、その穂先で体や目がチクチクする。しかし、そうやって踏みしめられた跡に続いて歩く人々は楽に進める」。ゆりかごもそうだと思うんですね。いろいろな現状とか課題、なかなか映し出せなかった部分をゆりかごができたことで社会に映し出して、いろいろな批判がある中でも17年間続いて。楽になったというか、その

後がまだできていませんけれども、ゆりかが17年あるおかげで、まだ皆さんの頭の中に残って議論されている。

蓮田太二院長先生、田尻看護部長、今は蓮田健先生と慈恵病院の皆さんが、いろいろな意見がある中でもゆりかをずっと17年間意志を貫いてやっています。

私も当事者として2年前に生い立ちを公表して、やはりいろいろなことを言われます。Yahoo! ニュースになれば、いろいろ言われる。でも、それは僕のために発信しているのではなくて、ゆくゆくは他の当事者、預けられた子どもたちが声を上げやすいように、声をしっかりと話せるように、僕がそういう道を先頭に立って作っていく必要があるのではないか。この言葉のとおり、そういう子どもたちのために、やはり自分が果たせる役割をやっていかないといけないなと思っています。

最後に自分の好きな言葉を、いつも贈る言葉を言って終わろうと思います。「置かれた場所で咲きなさい」という言葉が自分はとても好きで、心の支えになっている言葉でもあります。やはり皆さんと置かれている場所、環境は違います。私は私なりに自分の置かれた場所で、今、花を咲かせられているかは分かりませんが、一生懸命頑張っています。ここにいる皆さんもそれぞれ、これまでも花を咲かせて、またはこれから咲かせるように努力してきていると思うんですね。

立場は違うけれども、決してこれはゆりかごの子だけではなくて、今回のテーマ「みんなで子どもを育てる社会」ということで、子どもたちがどうやったら幸せに暮らしていけるかというのは、田尻さんから愛の講演がありました。そして私の話をさせてもらったので、その話を受け取って、自分にできること、自分が今置かれた環境で何ができるかを少しでも考える機会になれば、今日東京に暑い思いをして来たかいがあったかなと思います。ご清聴ありがとうございました。